読売俳壇

高野ムツオ 選

百の灯に百の病床春雷す
津市　中山　道春

【評】「百」の頭韻を踏んだ表現が、それぞれの灯の下、病と闘う人々の姿を浮き彫りにする。折しも鳴りだした春雷が絶妙で、懸命の患者一人一人へ天の励ましを伝える。

それぞれの芽吹き囃して雑木山
加須市　福田　啓一

【評】いっせいに芽吹き出した雑木山。競ってではなく、互いに励まし、喜び合ってと受けとめたのである。人間世界もこうありたいもの。

むすび食ふ桜の下の猿田彦
福井市　長谷川量可

【評】春祭の昼食時間の一コマ。祭行列の先頭を務める猿田彦に扮した若者が一人腹拵えをしている。桜もねぎらうように花びらを散らす。

鮎放つ小さきゴム長靴の列
倉敷市　中路　修平

松の芯伝ひ歩きを始めし児
川越市　大野宥之介

黄水仙覗き込みたる車椅子
東大和市　神山　文子

学童やたんぽぽ吹かずにはをれず
矢板市　鈴木　文代

看護師に桜蘂ふる夜勤明け
所沢市　荻野オサム

代掻きの農機一台ひとひとり
十和田市　佃　正子

問答を仕掛けたくなり紫木蓮
越谷市　安居院半樹

正木ゆう子 選

土浦や花の流れに挟まれて
土浦市　小川　智昭

【評】地図でみると、土浦市（茨城県）は確かに桜川と新川に挟まれている。ともに霞ヶ浦へ注ぎ、桜の名所。いつか行ってみたくなるような、平明で優しい御国自慢の句だ。

山吹の花啄みて岩魚立つ
高崎市　桜井　覚

【評】岩魚に詳しくないので、こんなことがあるのかと思うが、あるのだろう。珍しくて、美しい景。実際に見ることは、想像を超える。

雨音が雨音を消す春の夜
入間市　豊泉　繁雄

【評】降り続く雨音に、一段と強くなった雨音が被さる、ということか。寝ていて、外の音に耳を澄ます。雨音の他には何も聞こえない春の夜。

初ツバメおだやかな世ももどり来よ
福山市　平井　和子

ルッコラのゆれて紋白蝶立てり
大分市　小幡　博美

ふらここは老いの止まり木揺れもせで
木津川市　島野　秀子

新玉葱レシピ無用の丸かじり
周南市　原田　英夫

花筵重石代わりの一升瓶
土浦市　今泉　準一

プリンスとプリンセス数多薔薇競ふ
横浜市　大井みるく

二日目の草餅をゆつくり焦がす
大阪市　今井　文雄

小澤　實 選

百年の校歌の川を鮎上る
町田市　枝沢　聖文

【評】百年の間、歌われつづけてきた校歌の中に登場する川を、今年も鮎がのぼっていく。その地の名門の高校の校歌であり、その土地を流れる有名な川なのであろう。

サンドイッチに練り芥子今朝の夏
対馬市　神宮　斉之

【評】立夏の朝食に食べたサンドイッチの練り辛子が効いていた。目では見えないが、辛さにはっとした感じが立夏にふさわしいと思う。

恋猫の寺横切るやふぐり揺らし
横浜市　菅沼　葉二

【評】恋猫が横切る場所が、寺の境内とはおかしみがある。猫の恋の句も今までたくさん見てきたが、ふぐりまで登場する句は初めて見た。

春灯のゆれて地震にちがひなし
久喜市　深沢ふさ江

マルチーズの大きなあくび花筵
新潟市　古泉　浩子

行く春やスイッチバック二度三度
東京都　山口　照男

初燕けふは散髪日和なり
青梅市　増田　正

学校へ行けぬ子もゐて新学期
佐野市　桑原　博

よく笑ふ客の来てゐる春障子
佐野市　高橋すみ子

咲き満ちてきはまる花の静寂かな
東京都　杉中　元敏

津川絵理子 選

孫の句はいつも中八春の風
東京都　森　一平

【評】孫と一緒に俳句を作っておられる。祖父からすると「いつも中八」なのが気になるのだ。それでも共通の趣味を持つ喜びが「春の風」に感じられる。

親に子を返し永き日持て余す
町田市　谷川　治

【評】孫を預かって一緒に遊んでいた。子守をするのは大変だが、返してしまうと急に手持無沙汰になった。「持て余す」が面白い。

落花盛ん大人だらけの遊園地
小諸市　藤　雪陽

【評】今時の遊園地、テーマパークは大人も楽しめる。それにしても中七がユーモラスだ。大人にも、花を惜しみ遊ぶ時間が必要なのだ。

学究の父の春灯なり低し
東京都　望月　清彦

御喋りの口開けて待つチューリップ
周南市　木船　君枝

二十円時給上がりぬ豆の花
東京都　大武美和子

春暑き養鶏場のにほひかな
三原市　天崎　千寿

猫の尻尾や春雨の温度計
塩尻市　神戸　千寛

石棺に残る馬の画春の草
神戸市　末永　拓男

陽炎の中へゆるりと車椅子
宇都宮市　大門とよ子

小池　光 選

ゆつくりと婆の押しゆくベビーカーまるまる太き竹の子を乗せ
村上市　鈴木　正芳

【評】ベビーカーで買い物を運ぶ高齢者をときどき見かける。きょうはまるまる太った竹の子一本のせた人を見た。生命力あふれる感じ。

栗木　京子 選

千羽鶴のように房なす藤の花ひと吹きの風にどっと羽ばたく
宮崎市　長友　聖次

【評】咲き満ちた藤の花は、たしかに千羽鶴のように見える。吹く風に揺れる様子には迫力が感じられる。「千羽鶴」から始まって「羽

俵　万智 選

あの日助けた鶴である可能性を捨てきれず自称息子を家へと上げる
東京都　留留留

【評】電話ではなく訪問式のオレオレ詐欺。息子でないことは一目瞭然なのに、どこか信じてやりたい気持ちがある。自分に折り合い

黒瀬　珂瀾 選

お父さんと一緒やねえとスワイプに反応しないスマホに母は
大阪市　畑　依裕

【評】反応がにぶいスマホと、呼んでもなかなか返事をしないお父さん。どっちも困ったものだが、お母さんの言葉にはどこか余裕がある。やはり、長年の夫婦の中ですね。

明記。◇他の媒体、選者
前郵便局留、読売歌（俳）
の影絵はみつばち

写実を未来する

俳句あれこれ　大塚凱（俳人）

未来を想像するとは、どういうことだろう。YouTubeチャンネル「ゲームさんぽ」のゲーム内の世界を吟行する企画で、関悦史は△飛ぶ車真夏の影を落としけり▽と詠んだ。現実には、空飛ぶ車はまだ街を行き交ってはいない。けれども俳句は、未体験の写実を立てることもできる。地面に動く空飛ぶ車の影は、大きくて気が散るかもしれない。その車の鍵はどんな形なのか（そもそも物理キーではないのかも）。空中ルーレット族がきっと現れる。未来を想像することは、実はこんな細部を想像する力に支えられているのではないか。

四回の連載も今回で最後になる。初回は花売を「ちょっと先の未来を手渡す仕事」と書いた。AIが残す、人間的な時間を書いた。「未来と約束を反故にされた者の未練」を書いた。俳句を手渡し感受することは、過去と現在と、その先の時間とを繋ぎ直す営みだと信じている。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭